

# 中島敦の G・K・チェスタトン受容

## — 「山月記」「幸福」と『Orthodoxy』との比較から —

橋 本 正 志

### 【要 旨】

中島敦の「山月記」「幸福」には、イギリスの作家・チェスタトンの評論『Orthodoxy』の影響がみてとれる。小論では、中島の「ノート」に『Orthodoxy』からの英文抜粋があることに着目し、逆説や警句を用いた批評で知られるチェスタトンと中島文学との関わりについて考察した。中島は主に「山月記」「幸福」の構想・執筆の過程で『Orthodoxy』全体にわたって強い関心を示しており、これらの作品に与えた同書の影響はきわめて大きいことを指摘した。

### 【キーワード】

キリスト教 運命観 虎 夢 enigma (不可解さ)

### はじめに

小論では、昭和作家・中島敦(1909～1942)の小説「山月記<sup>1</sup>」「幸福<sup>2</sup>」におけるイギリスの作家・批評家、ギルバート・キース・チェスタトン(1874～1936)の評論『Orthodoxy<sup>3</sup>』の影響を指摘し、中島文学におけるチェスタトンの受容のありようについて考察する。中島の資料には『Orthodoxy』の書名と出版社名が記された1936年の「手帳(昭和11年)」のメモや、同書からの英文抜粋(「ノート第11」)が残り、また原書全体にわたり「山月記」「幸福」の内容に酷似した部分が多くある。中島は『Orthodoxy』を読了後、その内容を各作品執筆時に活かしていたと思われる。

とくに「山月記」構想から「幸福」脱稿まで、旧南洋群島で使用された「島民」児童向けの国語教科書の編纂者としてパラオに赴いた南洋行(1941年7月～1942年3月)の前後にわたり(『西遊記』に材を取った「悟浄歎異<sup>4</sup>」の成立時期とも並行して)、チェスタトンの同書の内容を執筆の参考としていた可能性はきわめて高い。同書が上記の作品成立の過程で与えた影響の大きさは、従来指摘<sup>5</sup>のあったパスカルの遺著『パンセ』と比べても遜色がない。

1 『文学界』第9巻第2号(1942年2月)に、「文字禍」とともに「古譚」の総題で発表された。

2 単行本『南島譚』(新鋭文学選集2)(今日の問題社、1942年11月)に収録され、初めて発表された。

3 G.K. Chesterton, *Orthodoxy* (New York: Dodd, Mead & Company, 1908)。中島の「手帳(昭和11年)」のメモには出版年の記載はない。引用は「手帳」記載時に近い1924年の版に拠った。

4 註2に同じ。

5 大西雄二郎「中島敦の側面」(『ツシタラ3』)〈『中島敦全集』第2巻月報〉所収、文治堂書店、1960年6月印刷)など。

そこで小論では、「ノート第11」の英文抜粋のうち、『Orthodoxy』から抜粋された箇所を特定し、まずはそれらと南洋行後に執筆された「幸福」との関連を指摘したい。次に原書全体の内容を踏まえながら、南洋行以前に脱稿された「山月記」との関わりについても遡って考察することで、総じて南洋行前後にわたる中島文学におけるチェスタトンの影響を明らかにしていきたい。その上で後半、中島とチェスタトンとの関係について具体的な文辞を挙げて分析することは、「山月記」「幸福」研究に新たな視点をもたらし、とくに「山月記」本文における「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」などの表現の典拠を新たに指摘する上でも示唆的な内容となろう。

なお、英文の訳文には安西徹雄氏の訳<sup>6</sup>を引用し、参照させていただいた。

## 1. 「ノート」のメモおよび英文抜粋から

中島がパラオから帰国した後(1942年3月半ば以降)に執筆した「幸福」の素材としては、これまで前述の『パンセ』ほか『列子』(佐々木充氏論<sup>7</sup>)の二書が主に指摘されてきた。加えて作中の「誉れの投槍」に関するエピソードから、南洋で親交を結んだ民族誌家・土方久功の著作や研究<sup>8</sup>も下敷きにされている。また「幸福」「夫婦」の草稿が記された「ノート第4」の末尾には、鉛筆書きで「幸福ナ男」「転世、生、」などと記された上からチェスタトンの名前がペンで重ねられており(図1参照)、こうした異なる筆記具での「数次にわたる書きこみ<sup>9</sup>」については、すでに木村東吉氏によって次のような分析がなされている。

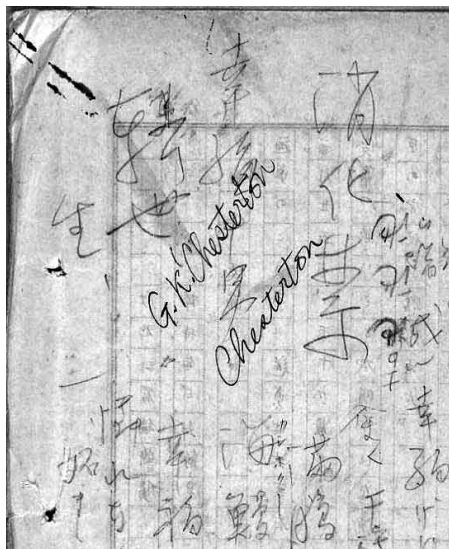


図1 「ノート第4」(40ウ・左上部分)

このうち「G.K.Chesterton」は、英国のカトリック系の小説家・批評家で、作者の昭和十一年の手帳中には、その代表作についてのメモ「Orthodoxy / G.K. Chesterton (Dodd, Mead & Co.)」があり、旧蔵書には、その著『Stories, Essays & Poems / J.M. Dent & Sons』が確認される。逆説、洒落を愛し、ささいな事例の中から重大な真理を掴み出して見せることで読者を驚かすといわれるこの作家を、作者が「幸福」を構想中、念頭に置いていたことは、十分考えられる<sup>10</sup>。(下線引用者。以下同じ)

たしかに、これらは「幸福」執筆中にチェスタトンの名を想起し、おそらくはその著作の内容等を確認する目的で記したメモであることは間違いなさであろう。木村氏は中島の旧蔵書にも触れ、中島が「幸福」の構想中にチェスタトンの著作を参考に使っていた可能性を指摘したが、具体

6 G.K.チェスタトン著／安西徹雄訳『正統とは何か』(新版)春秋社、2019年4月。

7 佐々木充「『南島譚』三篇—光と闇』、『幸福』—三つの世界」(『中島敦の文学』〈近代の文学・10巻〉所収、桜楓社、1973年6月)。

8 土方久功「パラオの勇者」(『パラオの神話伝説』所収、大和書店、1942年11月)など。

9 鷲只雄「解題」(『中島敦全集3』所収)679頁。

10 木村東吉「中島敦『幸福』の意味と位置—「石とならまほしき」思いの変容過程について」(田鍋幸信編著『中島敦・光と影』所収、新有堂、1989年3月)244、246頁。

的な箇所の特定や内容にまでは言及されていない。とくに小論で考察する『Orthodoxy』については、中島の「手帳（昭和11年）」のうち、原書も読むに至った『パンセ』の書名の次に続けて記されていることから（図2参照）、『パンセ』に関心をもった時期に『Orthodoxy』に対しても同等の関心があったと考えられる。つまり、中島がチェスタトンの『Orthodoxy』に興味を抱いた時期は「昭和十年代の初め、『パンセ』を原書で読み、ハックスレイの『パスカル』を翻訳していた<sup>11)</sup>頃、すなわち『西遊記』に取材し「沙門悟浄の手記」と副題のある「悟浄歎異」の世界を構想していた時期とほぼ重なっているといえよう。

『Orthodoxy』は中島の蔵書目録<sup>12)</sup>には見あたらないが、同書の内容は「ノート第11」の中かなりの分量にわたって抜粋されており（全9章のうち2、4、5の各章より）、中島が本書を実際に手に取って書写したことは間違いない。また、抜粋された箇所以外にも本書の広範囲にわたって「山月記」「幸福」などの表現と関係する内容が数多く指摘できることから（後半の6、7、9の各章に著しい）、中島が原書全体を読了していた可能性が指摘できる。とくに抜粋箇所のうち、チェスタトンが「キリスト教の原理」に基づき、神と人間を含む世界とを「分離」した結果、世界が「明るい光に照らし出されてきた<sup>13)</sup>」との感得に到った原体験を回想した第5章「世界の旗」の一節（V. The Flag of the World, p. 144）は印象的だったと思われ、多少の誤写はあるものの、次の通りほぼ全体が中島によってそのまま抜粋されている（図3参照）。

言ってみれば、私はまるで、生まれてからこのかた、二つの巨大な手に余る機械を、わけもわからずいじくり回していたようなものだった。二つの機械は形もまるで別々で、どう見ても何の関係もないようにしか見えなかった。二つの機械とは、つまりこの世界と、そしてキリスト教の伝統である。この世界という機械のほうには、一つの穴が開いていた。この世を愛しながら、しかも、頭から信じ切ってはいけないという事実、〔中略〕——それがその穴であった。一方、キリスト教という機械のほうには、固い釘のような突起がついていた。キリスト教の神は人格神であり、神自身とは別個の存在として世界を創造したというドグマ——これがその突起であった。このドグマの釘は、世界の穴にぴったりはまった。ぴったりはまるように作ってあることは明らかだった。ところが、そこで不思議なことが起こり始めたのである。二つの機械のこの二つ

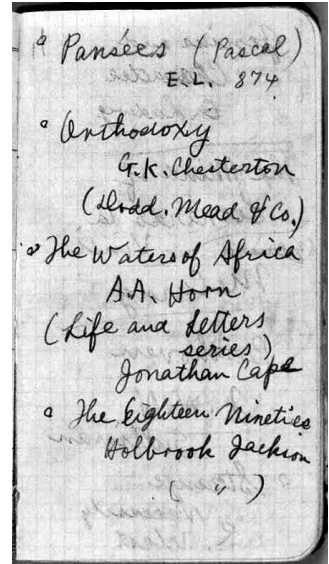


図2 「手帳(昭和11年)」(86)

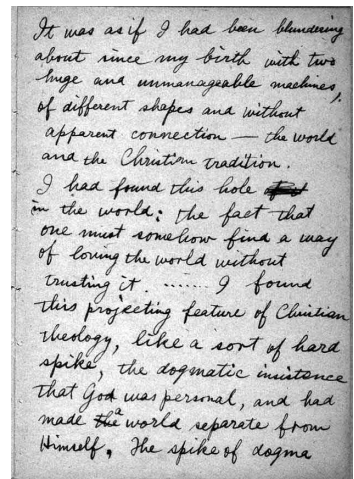


図3 「ノート第11」(110)

11 木村一信『「悟浄歎異」—成立への過程・パスカルの受容』（『中島敦論』所収、双文社出版、1986年2月）94頁。なお引用は、1991年8月刊行の2版による。

12 『中島敦文庫目録（日本大学法学部所蔵）』（日本大学法学部図書館、1980年11月）。

13 「5 世界の旗」（以下「5」と略す。前掲『正統とは何か』）140頁。

の部分が組み合わさると、一つ、また一つ、全部の部分がみな組み合わせり、ぴったりはまっていったのである。あんまりもののみごと合っていくので、私は思わずゾッとしたほどだ。(「5」136~137頁)

チェスタトンが経験したという「この世界」と「キリスト教の伝統」との関係をめぐる認識上の発見の場面であり、キリスト教の教義「dogma (ドグマ)」を介して目前の「the two machines (二つの機械)」が合体する様子が記録されている。何ら関連のない「二つの機械」同士が組み合わせあって、やがて一つの形となる解釈そのものに、中島は大きな興味を抱いたようである。後年、異類(虎)や夢の世界を現実と対比するように描いた「山月記」「幸福」の方法とも相通ずる内容であり、いわば中島文学の根幹となる文学的発想へ少なからぬ影響を与えた場面ではなからうか。

他に「ノート第11」で注目すべき抜粋は、上記の文脈で「one assumption (一つの前提<sup>14</sup>)」に基づいて世界を把握することの危険性を指摘した箇所(IV. The Ethics of Elfland, p. 107)である(図4参照)。

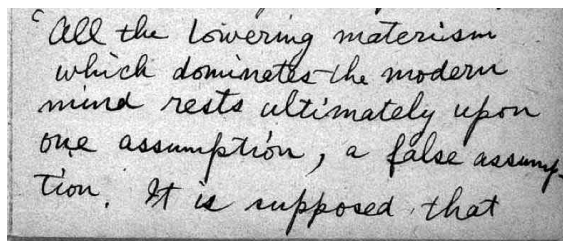


図4 「ノート第11」〈6オ・下部分〉

現代を支配する唯物論は天をも摩する勢いに見えるが、しかしその根拠とするところは、実は結局のところたった一つの前提、しかも誤った前提にすぎない。何かを繰り返して起こるといえるのは、それが死んでいる証拠、時計仕掛である証拠と考えられている。もし宇宙に生命があり、人格を持つのであれば、宇宙は当然変化するにちがいない、もし太陽が生きているのなら、当然太陽は踊り出すはずだ——人びとはそう決めかかっているらしい。(「4」98頁)

この抜書からは、「現代」を認識する方法は必ずしも一つだけではなく、「一つの前提」に依拠しがちな人びとの傾向を批判的に捉える、チェスタトンの見方への中島の共感が窺われる。これらのノートや手帳での抜粋等は、1936年から1942年に至る長期にわたって、一貫してチェスタトンに興味をもち続けていたことの証左である。南洋行後の「幸福」構想に至るまで、原書の抜粋部分等をあらためて確かめ、執筆に活かそうとしていたことは間違いないと思われる。

## 2. 「悟浄歎異」の末尾を手がかりに

中島の『Orthodoxy』への関心が後の南洋行前後にわたって継続し、その間に執筆された「山月記」「幸福」などの作品世界に影響を与えていたことの例証として、同時期に完成をみた「悟浄歎異」の末尾(三蔵法師ら一行が野宿を余儀なくされたある晩の場面)を挙げてみたい。主人公・悟浄は、これまでの師らとの距離をめぐるさまざまな葛藤(とくに師に対する現在の胸臆)を次のように吐露している。

14 「4 おとぎの国の倫理学」(以下「4」と略す。前掲『正統とは何か』98頁)。



俺は先刻から仰向けに寝ころんだ儘、木の葉の隙から覗く星共を見上げてゐる。〔中略〕師父は何時も永遠を見てゐられる。それから、その永遠と対比された地上のなべてのものの運命をもはつきりと見てをられる。何時かは来る滅亡の前に、それでも可憐に花開かうとする叡知や愛情や、さうした数々の善きものの上に、師父は絶えず凝乎と慥れみの眼差を注いでをられるのではなからうか。星を見てゐると、何だかそんな気がして来た。〔中略〕俺は、心の奥に何かボツと点火されたやうなほの温かさを感じて来た。

ここには、従来指摘されてきた『パンセ』の影響のみならず、『Orthodoxy』の影響も多分に指摘できる。同書から、チェスタトン自身が幼少より親しんできたイギリスの小説家ダニエル・デフォー（1660～1731）の冒険小説『ロビンソン・クルーソー』の印象的な場面に触れて、自らの文学的原点を振り返った箇所（IV, p. 116, p. 118）を訳に基づいて順に確認してみたい。

しかし私は事実そう感じたのである。世界に存在するあらゆる物は、一つ残らず、どんな等級、いかなる種類のものにせよ、みなクルーソーの船から奇蹟的に救い出されたものにちがいない、と。〔中略〕木々にしても星々にしても、みな難破船から救い出された物に見えた。（「4」107頁）

さて最後に、〔中略〕私の心に忍びこんだ漠然としてしかも広漠たる印象があったのだ。この世にあるあらゆる善は、何か原初の破滅から救い出され、聖なるものとして伝えられてきた遺品ではあるまいかという印象だった。クルーソーが便なるものを難破船から救い出したように、人間は善なるものを救い出したのである。私はすべてこういうことを感じたのだ。（「4」109頁）

この「悟浄歎異」に関する場面だけで、中島文学における『Orthodoxy』の影響の有無は判断できないが、同書全体にわたって中島文学の特質（「山月記」「幸福」の構造や表現にみる）に酷似する内容が散点していることは見過ごせない。「悟浄歎異」において、「滅亡」を前にした三蔵法師を見る悟浄の内面を表現した中島の筆致に『ロビンソン・クルーソー』の話を通して「破滅」からの救済を見てとったチェスタトンへの強い共感が含まれていた可能性は否定できない。

中島作品におけるチェスタトンの影響をより詳細に指摘していくにあたって、ここであらためて『パンセ』の影響の下で「悟浄歎異」の三蔵法師像が造型されたとする木村一信氏の指摘を確認しておきたい。

中島は、『パンセ』を読み進むにつれて自己の〈存在論的苦悶〉に対応する方向づけを次々と発見し、その中から三蔵法師像を思い描き出していった。中島の数年にわたる強いパスカルへの関心、昭和十二年前後の中島をとらえていた心情的な世界観、さらにその後の『悟浄歎異』執筆へと辿ってくると、このように考えることも妥当であると思われる<sup>15</sup>。

この指摘とあわせて、先の「手帳（昭和11年）」（前掲の図2）に記された書名の隣接する記載からも、『パンセ』のみならず、チェスタトン自身がいかに「宗教的確信を深めるに到ったか、

15 前出の木村一信論、101頁。

その成長の過程を物語ろう<sup>16</sup>とした『Orthodoxy』にも関心をもっていたことは、この時期の中島の「情動的な世界観」を把握する上で大きな意味がある（奇しくも1936年はチェスタトンの歿年であった）。ここに喋喋するまでもなく、『パンセ』はキリスト教擁護の立場から書かれた断章の集成であるが、中島は1937年前後にはすでに『パンセ』はもとより同じキリスト教に関する『Orthodoxy』からも同様の内面的な「方向づけ」を見出し、そうした関心から同書の一節を抜粋していたのではないか。いずれにせよ南洋行前後に、中島は『Orthodoxy』に対して強い関心をもっていたことは間違いなく、後述するようないは『パンセ』以上の影響を中島文学にもたらしていた可能性が指摘できるのである。

### 3. 「幸福」との比較から

パラオの「オルワンガル島」を舞台に、「夢」を通じて「長老」と「下僕」の立場が逆転する過程を描いた「幸福」の作品構造においても、『Orthodoxy』からの影響が指摘できる。とりわけ夢と現実という二つの世界が入れ替わる物語の結構においては、次のような一節（IV, p. 105）が興味深い。

おとぎ話は二つの確信を私の中に植えつけていた。第一に、この世界は実に不思議な驚くべき世界であって、今とはまったく別様になっていたかもしれない世界、しかし同時にまったく異様に歓びに満ちた世界だという確信。第二に、この不思議と歓びを前にしては〔中略〕そこにどれほど異様な制限があろうとも、われわれはすべからくその制限に謙虚に従わねばならぬという確信。（「4」95～96頁）

チェスタトンは子ども時代に「おとぎ話」に親しんだことで「この世界」を相対化する視点を獲得したと述べる一方、今「この世界」にあることの〈諦念〉も同時に見出したという。この「二つの確信」が「現在の私の信念」（「4」96頁）をもたらしたとする認識の方法は、『Orthodoxy』の骨子として本書全体を貫いている。この方法は「幸福」に登場する「長老」「下僕」のそれぞれの夢と現実との関係性や物語の結末を描く方法とも共通し、以下の一節（VII. The Eternal Revolution, pp. 220–221）もあわせて推論すれば、『Orthodoxy』は『パンセ』『列子』とともに「幸福」の世界を決定づけたといえるのではないか。

自分に統治の能力があると自信しない男こそ統治の任に当たるべきである。〔中略〕つまり、われわれは王冠を両手に捧げ、地球上の陸地をくまなく探しまわって、自分には王冠を戴く資格などないと思っているただ一人の男を見つけ出さねばならぬということだ。〔中略〕王冠を与えねばならぬのは、自分は統治などできないと思っているもっと例外的な人間なのである<sup>17</sup>。（傍点原文。以下同じ）

また「幸福」において、「鱗」によって足の指三本を失ったことは「不幸」のようだが、脚全体ではなかったことを「感謝しよう」と受け止め、そうした「己が運命を格別辛い」とは思わず「神々に祈ることがあつた」という下僕の一連の態度の描写にも、以下のような原書の「幸福」

16 「9 権威と冒険」（以下「9」と略す。前掲『正統とは何か』）259頁。

17 「7 永遠の革命」（以下「7」と略す。前掲『正統とは何か』）215～216頁。

観が影響を及ぼしていたと考えられる。

The test of all happiness is gratitude; and I felt grateful, ... (IV, p. 98)

(あらゆる幸福の源は感謝である。そして私は感謝に満ちていたのである。「4」88頁)

こうした原書の内容は、「汝は幸福ならざるべからずと誰が決めたか？ 一切は、幸福への意志の廃棄と共に、始まるのだ」との「狼疾記」の一節や、「幸福とは、不幸をなくすこと〔中略〕ではなく、その不幸の所在を忘れることか？」といったメモ（「断片18」）の内容とも関連しており、実際にこれらの表現には以下の一節が関わっていた可能性もあろう。

... the happiness depended on *not doing something*... (IV, p. 101)

(幸福は、われわれが何かをしないことにかかっている。「4」92頁)

以上から、中島は夢と現実との異なる二つの世界があることを前提として、現実を相対化する「おとぎ話」の世界から「人間の幸福とは何か」といったテーマにアプローチする原書の内容に強い興味を示すとともに、「幸福」執筆に際して逆説を用いたチェスタトンの論じ方そのものに影響を受けていた可能性が指摘できよう。こうした異なる世界に生きる人間の〈入れ替わり〉といった「一つの前提」によらない認識の方法で描くこと自体が、執筆の背後でチェスタトンが示したキリスト教における「幸福」観とも〈共鳴〉していたのである。実際に中島の親族には自伝的小説「斗南先生」に「渋谷の伯父」として登場する聖公会の牧師・関 翊（1865～1953）<sup>たすく</sup>がおり、その翊への生涯にわたる「尊敬<sup>18</sup>」の念も同じキリスト者としてのチェスタトンへの関心を強めていった要因だったのだろう。

ただし、上述した中島の「幸福」観の原点は特定の宗教へ収斂するものではなかった。たとえば次の「山月記」の一節、

今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了ふだらう。〔中略〕己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだらう。

といった後年「山月記」で追究された「人間」にとっての「しあはせ」についてや、「生きもののさだめ」といったより普遍的で実存的な問いへの関心に進み、やがては「幸福」の作品における主題へと展開していったと考えられる。

このように、南洋行前後に執筆された「山月記」と「幸福」には、チェスタトンの『Orthodoxy』に根源をもつ表現が散見される。中島の「手帳」「ノート」における記述や、「狼疾記」での幸福観、またパラオからの帰国後に書かれた「幸福」草稿に記された「G.K.Chesterton」などのメモは、5年余の長期にわたって中島が一貫してチェスタトンに関心をもち続けていたことを証するものである。その意味で、「山月記」と「幸福」は『Orthodoxy』を共通の基盤とする作品であり、その成立過程で中島とチェスタトンとの明確な関係性が指摘できることは、今後両作品の解釈に新たな視点をもたらすものといえよう。

18 奥野政元「中島とキリスト教」（勝又浩・木村一信編『昭和作家のクロノトポス 中島敦』所収、双文社出版、1992年11月）90頁。

#### 4. 「山月記」への影響 (1)

引き続き、中島とチェスタトンとの関わりについて考えていくにあたり、南洋行前に成立した「山月記」の表現を検討する。「山月記」を論じる際にしばしば引用される一節に、次の1939年に記録されたと推定される「ノート第9」のメモがある。

人間は誰も猛獣使で、それ〜自分の性情が、その猛獣に当るんださうだが、全く、ボクの場合、自尊心といふやつが、猛獣でしたよ。ねえ。全く、自尊心と、それから、もう一つ、羞恥心、こいつが曲者でね。大人しさうで決して、さうでない。ハイエナかジャカアルみたいな奴でね。ライオンにいつもジャカアル、がついてゐるやうに〔後略〕(下線原文)

この断片が、直接「山月記」の本文「人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ<sup>おれ</sup>。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ」として活かされていくことは、定説としてこれまでも指摘されてきた。とくに「猛獣使」「といふ」に関連すると思われる一例 (IX. Authority and the Adventurer, p. 267) を挙げておく。

野生の動物は奔放だと人は言うが、本当に奔放な野生の動物は人間しかない。束縛を破って脱出したのはただ人間あるのみだ。〔中略〕他の動物はすべて飼ひ馴らされている。ただ人間だけはけっして飼ひ馴らされることはない。〔中略〕必ず柵を破って脱出を試みる。(「9」262頁)

他にもすでに挙げてきた複数の抜粋の前後に、「人間」と「虎」との関係性 (you and a tiger) を譬えに用いた警句的な表現を含む一節 (VII, p. 206) が多数あることに着目したい。引用が長くなるが、「山月記」執筆時に中島へ直接示唆を与えた可能性があるため、一部を列挙するものである。

すべての生物は血続きであり、しかも生存競争を繰り返しているという説は、〔中略〕気がいじみたセンチメンタリズムの論拠ともなりうる。〔中略〕進化論に則れば、非人道的になることもできるし、馬鹿馬鹿しいほど人道的になることもできるけれども、人間的になることだけはできぬのだ。〔中略〕進化論におうかがいを立てているかぎり、虎をどうやって理性的に扱えばよいかは聞かせては貰えない。では虎にたいする理性的な態度とは何か。奴の縞は賞めるが、奴の牙は避けることである。(「7」202頁)

If you want to treat a tiger reasonably, you must go back to the garden of Eden. (VII, p. 207)  
(虎を理性的に扱いたければ、すべからくエデンの園に帰るほかない。「7」202頁)

You may, if you like, free a tiger from his bars; but do not free him from his stripes. (III. The Suicide of Thought, p. 72)

(お望みとあらば、虎を檻から解放するのは自由であろう。しかし虎をその縞から解放するのは自由ではない<sup>19</sup>。)

19 「3 思想の自殺」(前掲『正統とは何か』) 62~63頁。



以上からは、『Orthodoxy』の随所に「山月記」の表現と酷似した「人間」と「虎」との理性にまつわる考察と議論が含まれていることが明らかである。「進化論」に対する批判的記述を翻案しつつ、中島が「幸福」のみならず「山月記」執筆に際してもチェスタトンの原書の内容を踏まえていた可能性はきわめて高いといえよう。「山月記」には『Orthodoxy』に示された「すべての生物」の一員としての人間認識を前提に、人間の理性と虎の非人道性を対比的に捉える描法が踏襲されており、「山月記」の副素材とみなしても差し支えないのではなかろうか。南洋行前後の作品を結び、とりわけ「山月記」から「幸福」へと追究されていくテーマの基底に原書からの直接的な影響が見出されることは興味深い。「山月記」の素材「人虎伝」には見当たらず、これまで中島の創作と解されてきた部分（主に「人間」<sup>20</sup>に関するもの）はもとより、虎としての李徴が語る「生きもの」「運命」「性情」観の全般にわたって、『Orthodoxy』の内容を想起させる部分が多数指摘できることは重視されてしかるべきであろう。

このように、『Orthodoxy』には「人虎伝」にない「山月記」本文と酷似した一節や表現が多くある。中島は1941年初夏の「山月記」脱稿までにチェスタトンの『Orthodoxy』を読了し、そこで獲得した「人間」「動物」「運命」「性情」観を踏まえながら、「人虎伝」のプロットや世界観に基づいて「山月記」を執筆していたと考えられる。

## 5. 「山月記」への影響（2）

「山月記」に与えた『Orthodoxy』の影響について、さらに指摘していく。従来、「山月記」解釈では、主人公・李徴の「虎」に変身した理由は、概ね次の三つの論点に集約されてきた。すなわち、①運命論（「理由も分らずに生きて行くのが、我々生きものさだめだ」「一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだつたんだらう。初めはそれを憶えてゐるが、次第に忘れて了ひ、初めから今の形のものだつたと思ひ込んでゐるのではないか？」）、②性情論（「我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である」）、③芸術至上主義論（「妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから、こんな獣に身を墮すのだ」）である。これら三点すべてが『Orthodoxy』にも含まれていることを指摘したい。これまで中島の独創とされてきた虎への変身理由の根柢に、『Orthodoxy』の内容が踏まえられていた可能性があるため、引き続き列挙していく。

まず①運命論に関するものとしては、次のような一節を挙げてみたい。

If the human being conceives and brings forth a human child instead of bringing forth a fish, or a bat, or a griffin, the reason may not be that we are fixed in an animal fate without life or purpose. (IV, p. 109)

（人間は人間の子をはらみ、人間の子を生む。魚や、コウモリや、怪獣の子を生みはしない。しかしその理由は、生命も目的もない動物界の宿命に支配されているからではないかもしれぬ。「4」100頁）

Every man has forgotten who he is.(IV, p. 96)

（みんな自分が誰だか忘れてしまっている。「4」87頁）

20 楠井清文「中島敦『山月記』に見る「人間」への問い—哲学的人間学との接点」（『日本文芸学』第55号、2019年3月）に詳しい。

We have all forgotten what we really are.

(IV, p. 97)

(自分が本当は誰であり何者なのか、われわれはみな忘れ去っているのである。「4」87頁)

はじめの引用のうち「an animal fate (動物界の宿命)」という表現は、『Orthodoxy』の中でも一回しか登場せず、その表現の直前の部分(原書では左頁から右頁にかけて)が「ノート第11」に抜粋されていることから(図5参照。図4から続く本文頁)、この表現に直接中島が目を通していたことはほぼ間違いない。神によって恒常的に同じことを繰り返す「宿命」に関する抜粋部分(IV, pp. 108-109)を引用する。

太陽は毎朝東から出る。が、私は毎朝寢床から出るとはかぎらない。けれども私の場合に変化があるのは、別に私の活力がありあまるからではなくて、逆に活力が足りないからなのだ。

〔中略〕太陽が毎朝規則正しく昇るのは、ひょっとすると、昇るのに飽きないからである、と言うこともあるいは不可能ではないと言えなくもない。毎日同じことを繰り返すのは、生命がないからではなく、生命があふれ、ほとぼしっているからである、と言うことはできないことではないかもしれない。〔中略〕きっと神様は太陽に向かって言っておられるのにちがいない——「もう一度やろう」。そして毎晩月に向かって、「もう一度やろう」と言っておられるのにちがいない。(「4」99頁)

以上からも、「神様」によって動物はもとより太陽や月でさえ「規則正しく」永続的な「宿命」が与えられたとする Chesterton の解釈を綴った部分への共感が、「ノート第11」の抜き書きに繋がり、さらにその後の「山月記」の運命観の執筆へ展開していったことは明らかであろう。もともと中島には「unnaturalness」とのメモ書き(「ノート第2」)があるように、超自然的なものに関心があった。その上で、原書において抜粋箇所と近接する部分の表現(「an animal fate」など)が実際に「山月記」の表現に用いられていることから、『Orthodoxy』と「山月記」との直接的な関わりが指摘できるのではないだろうか。

また「山月記」では、「嗤つて呉れ。詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男を」とあり、こうした〈運命の不確かさ〉に関しては次の一節が関わっていると思われる。

... and it was common to say that many a man was a Great Might-Have-Been. To me it is a more solid and startling fact that any man in the street is a Great Might-Not-Have-Been. (IV, p. 116)

(偉人に「なりそこなつた」偉人は多いというのもよく言われたことだった。しかし私には、どんな人間も「生まれそこなつた」人間でありえたかもしれぬという事実のほうが、もっと手応えのある、もっと驚くべきことのように思えるのである。「4」107頁)

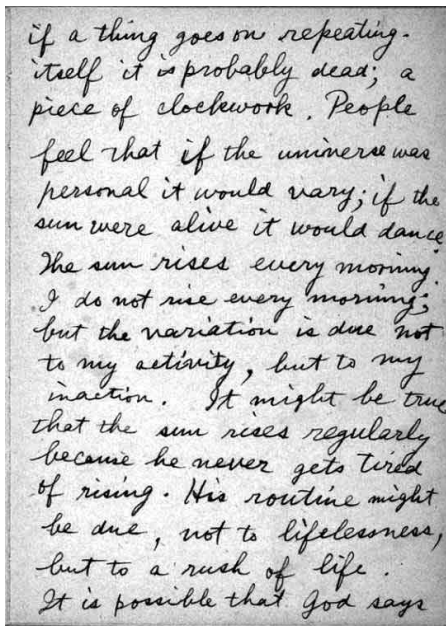


図5 「ノート第11」〈7オ〉

このように今後「山月記」読解においては、中島の持続的なチェスタトンへの関心を考慮に入れていくことは欠かせない視点といえよう。「山月記」の「生きもののさだめ」「詩人に成りそくなつて虎になつた哀れな男」などの表現や、後にさらに指摘していく諸点を含めて原書からの影響を窺わせる箇所は枚挙に遑がない。「山月記」成立過程において、チェスタトンの『Orthodoxy』からの影響は計り知れないものがあるといわざるを得ないのである。

## 6. 「山月記」への影響（3）

さらに「山月記」と『Orthodoxy』との関わりを指摘していく。②性情論に関して、原書の中には人間存在を「原罪」を負った〈神の創造物〉として位置づけ、その「矛盾の統一<sup>21</sup>」においてキリスト教の特質を見出す、いわば引き裂かれた存在としての人間の尊厳について考察した部分が複数ある。「山月記」の典拠と目されるため、以下にいくつか順に引用したい。

Take, for instance, the matter of modesty, of the balance between mere pride and mere prostration. (VI. The Paradoxes of Christianity, p. 172)

（たとえば、謙虚という問題を考えてみるがよい。単なる高慢と、単なる<sup>しょうみく</sup>惰伏との平衡をどう取るか。「6」166頁）

In one way Man was to be haughtier than he had ever been before; in another way he was to be humbler than he had ever been before. (VI, p. 173)

（ある意味では、人間はかつてためしのないほど誇りを高く持つべきだった。だがまたある意味では、人間はかつてためしのないほど身を低く持すべきだった。「6」167頁）

They, being humble, could parade themselves; but we are too proud to be prominent. (VI, p. 178)

（かつて人びとは、謙虚であるが故にこそ、人目を怖れず堂々と行進することができたのだ。だが今日のわれわれは、あまりに誇りが高すぎて、人目に立つことをむしろ恥とする。「6」172頁）

「山月記」のキーワード——「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」を髣髴とさせる矛盾・自家撞着「contradiction」(VI, p. 168)に関する表現が続く。さらに原書では、人間を明確に動物と相違した〈不可解〉なものとして位置づけ、その時として背反する感情については、以下のように繰り返し説明されている。

The real problem is — Can the lion lie down with the lamb and still retain his royal ferocity? (VI, p. 181)

（つまり、獅子は小羊の傍に身を横たえながら、しかもなお百獣の王としての<sup>しょうみく</sup>獠猛さを失わずにいられるか——これが問題だ。「6」175頁）

そもそもいかにすれば人間は、精妙な感情を持ちながらそれに捕われず、その感情を振り回

21 「6 キリスト教の逆説」(以下「6」と略す。前掲『正統とは何か』) 162頁。

しても何物にも当たったり壊したり、不都合を生じないような広々とした世間を発見できるのか。一組の激情を二つながら奔放に充足させるというキリスト教の逆説は、まさしくここでその真価を十二分に発揮するのだ。(「6」171頁)

直前に挙げた『Orthodoxy』の一節(VI, pp. 176-177)は、「激越に対立する二つのものを一つにまとめるという難事をやってのけた」(「6」168頁)というチェスタトンの「キリスト教の逆説」(Christian paradox of the parallel passions)に対する理解とともに、彼自身が信仰に至った理由を〈告白〉する文脈で語られているが、少なくとも「手帳(昭和11年)」にチェスタトンの名が記された1936年から「悟浄歎異」生成の1939年を経て、「山月記」脱稿の1941年初夏までの5年にわたり、これまで挙げたような「人間はみずからをどれほど小さく見てもよい。同時に人間は、みずからをどれほど大きく見てもよいのだった」(「6」168頁)といった逆理的な譬喩を多用し、旺盛な批評活動を繰り広げていたチェスタトンの『Orthodoxy』に、中島が関心をもち続けていたことは注目に値しよう。その間に描かれた作品、とりわけ「山月記」の執筆に際しては同書から多くの示唆が与えられたのではないか。中島は実際に「Original Sin」(原罪)とメモにも記していることから(「ノート第2」)、虎に変身した人間の運命をいかに描くかという文学的試行の背後に、チェスタトンを通じてのキリスト教の「原罪」への関心があったことを重視するものである。

さらに、次に引用する「出版屋」「小説家」たちの「エゴイズム」が招来した悲劇にまつわる部分(II. The Maniac, pp. 45-46)も、「山月記」執筆時に大きな影響をもたらしたと考えている。

自己を信じている人間は成功するとおっしゃる例の出版屋にしても、〔中略〕新しい生命を創造するかわりに、自分の個性を世間にひけらかすことばかり考えている小説家の先生がたにしたところで、実はみな、この物凄い妄想に即かず離れずつきあっている連中ばかりなのである。だがやがて、人間を取り巻くこの温い世界が嘘のように闇に消え、友だちは亡霊のように薄れて行き、この世の土台が崩れ去る時が来るだろう。そして、何も信じず誰も信じぬこの男が、自分自身の悪夢の中にたった一人で立ちつくす時が来るだろう。その時、かの偉大なるエゴイズムの格言は、皮肉な復讐の意味をこめて彼の目の上に書き記されるにちがいない<sup>22</sup>。

「山月記」で語られた「妻子」を顧みずに自らの乏しい「詩業」を重んじたという③芸術至上主義が招いた虎への変身理由とも酷似している。「詩人」を志す李徴の虎への変身という、さながら「悪夢」(nightmare)や「皮肉な復讐」(avenging irony)のような「山月記」の結末を連想させる一節であることは非常に興味深い。参考までに、この第2章から中島が実際に抜粋している箇所(II, pp. 27-28, p. 32)を示しておく(図6参照)。

詩人は気ちがいになりはしない。気ちがいになるのはチェスの名人だ。〔中略〕実際に少々おかしい詩

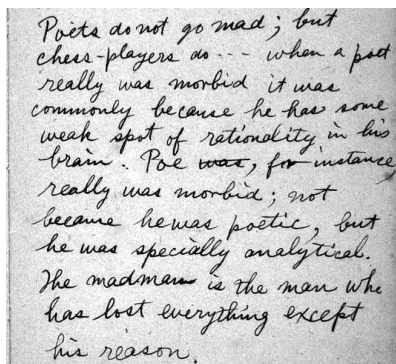


図6 「ノート第11」  
〈3オ・中下部分〉

22 「2 脳病院からの出発」(以下「2」と略す。前掲『正統とは何か』) 36頁。



人も今までなかったわけではないが、そういう場合をよく観察してみると、大抵は異常に合理性を好む人であったことが思い当たるのだ。たとえばE・A・ポウは実際に少々おかしかったが、別に詩的であったからではない。異常に理知的、論理的であったからである。  
(「2」19頁)

狂人とは理性以外のあらゆる物を失った人である。(「2」23頁)

## 7. 「山月記」から「幸福」へ

さて「山月記」には、「之は夢に違ひないと考へた。夢の中で、之は夢だぞと知つてゐるやうな夢を、自分はそれ逆に見たことがあつたから。どうしても夢でない悟らねばならなかつた時、自分は茫然とした」とあるように、「夢」という言葉が多用されている。島内景二氏は、素材「人虎伝」では「夢」との語が一切使われていないことに注目し、「『山月記』のキーワードの一つ「夢」は、中島敦が種本である『人虎伝』の重力から逃れ出ようとするエネルギーを象徴しているかのようだ<sup>23</sup>」と興味深い指摘をなしている。

「幸福」でも長老になる夢を見た下僕が「夢の中ながら、夢ではないかと疑つた。何か不安で仕方が無い」と振り返る姿が描かれ、長老と下僕それぞれの「奇態な夢」が対比されるなど、「山月記」と同様に「夢」そのものが重要なキーワードとなっている。長老が下僕に虐げられる夢を見て「夢の世界と昼間の世界と、何れがより現実なのかといふ疑」が脳裏をよぎり、現実の肉体に及ぼす影響の甚だしさに驚くとともに、「夢の世界が昼の世界と同じく（或ひはそれ以上に）現実であることは、最早疑ふ余地が無い」と悟る。一方、下僕の内面も「夢が昼の世界よりも一層現実であることを既に確信してゐる」と語り手によって代弁される。

チェスタトンも『Orthodoxy』の中で「夢」(dream)について言及しており(II, p. 46)、「山月記」のように現実の悲劇を強めて語るためではなく、むしろ「幸福」での現実としての夢の捉え方に近いが、夢を通じた現実認識である点は共通しているため、以下にやはり触れておきたい。

つまりこれは、人間はいつでも夢を見ていると信じることができるという理論なのだ。さてこれにたいして、お前は夢なんぞ見ていないという確固たる反証をつきつけることは明らかに不可能である。理由は簡単だ。どんな証拠を出してみたところで、それもやっぱり夢の中に出て来る証拠にすぎぬかもしれないからである。(「2」37頁)

あわせて「幸福」において、物語の最後に舞台の「オルワンガル島」がすでに海中に没していたことが突如として明かされる結末も、原書の一節(IV, p. 100)に基づいて解釈できる。「おとぎの国では、不可解な幸福が不可解な条件に支配されている」(「4」90頁)。夢と現実の二つの世界が描かれた「幸福」の世界は「this world does not explain itself」(IV, p. 117)、すなわち「この世界はそれ自体では説明がつかない」(「4」108頁)としたチェスタトンの主張を踏まえたものであり、「オルワンガル島」の水没という不可解な結末が「results must be irrevocable」(VII, p. 228)、「事件の結果は取り返しのでなければならぬ」(「7」223頁)という一節と

23 島内景二「有名だった種本……「人虎伝ブーム」があった」(『中島敦「山月記伝説」の真実』〈文春新書〉、文藝春秋、2009年10月)171頁。

も関連しているのではないか。従来、南洋行を経て獲得されたとみられてきた〈不可解〉なものをは認める受け止め方<sup>24</sup>は、むしろ中島が南洋行前後にわたって影響を受け続け、その間の作品を通じて受容されたチェスタトンの人間および世界認識にすでに胚胎していたと捉え直すことができよう。

最後に、あらためて人間と動物との違いについて、次のような一節に着目してみたい。

That man and brute are like is, in a sense, a truism; but that being so like they should then be so insanely unlike, that is the shock and the enigma. (IX. Authority and the Adventurer, p. 266)

(人間と動物が似ているというのは、ある意味ではぜんぜん陳腐な決まり文句だ。けれども、これほどの相似を示しているながら、しかもこれほど気持ちがよい似た相違を示すということ——これは実際容易ならざるショックであり、謎である。「9」261頁)

ここではとくに「the enigma (謎)」という語に留意する。「山月記」に「分らぬ。全く何事も我々には判らぬ」とあったように、チェスタトンがここで「ショック」とともに吐露した「the enigma」と相通ずる認識が南洋行以前の中島作品にもすでに存在していたことは重要である。それは「雞」の末尾などに初めて登場する認識、すなわち「南海の人間」の「不可解さ」に関する作中の語り手の認識と同根であり、その意味では南洋行を経て明確に「不可解さ」をありのままに受け容れ「新たな認識」を描く前提として、すでに南洋行前に獲得されていたのである。いわば、南洋行後の作品における「不可解さ」の肯定的描写はチェスタトンの『Orthodoxy』を通じて形成されていたといえよう。

中島は南洋行前にチェスタトンを原書で読む機会があり、その内容を参考として「山月記」を執筆した。それと並行して「悟浄歎異」を書き継ぎ、南洋行後に「幸福」を執筆するまで彼への関心を絶やさずにもち続けていた。各作品の執筆時には『Orthodoxy』を通じて獲得した人間や世界への認識が活かされたことは明らかである。とくに人間と動物(虎)との相違をめぐる内面の葛藤を描いた「山月記」や、二つの世界を舞台に立場の異なる人間が夢を通じて入れ替わる「幸福」の執筆時に、『Orthodoxy』の内容を中島が念頭に置いていた可能性は否定できない。

以上のように、中島は1936年以降、逆説を用いた批評で知られたチェスタトンの評論『Orthodoxy』を読了し、その要所を抜粋する過程で同書から多くの示唆を得て、南洋行前後にわたって「山月記」「悟浄歎異」「幸福」の執筆に活かしていたことが指摘できよう。とりわけ「山月記」「幸福」を執筆する際に、チェスタトンの『Orthodoxy』を参照していたことはほぼ間違いない。「山月記」「幸福」成立までの5年以上にわたり、人間存在の不可解さや内面の矛盾、葛藤をテーマにして、ときに「虎」へと変貌する厳しい「性情」と向き合い、それをいかに飼い慣らすかを追究する作品を描き続けてきた中島の文学的営為の展開の様相が浮かび上がるとともに、チェスタトンの『Orthodoxy』が中島文学に及ぼした影響の大きさを指摘することが可能なのである。

## おわりに

中島文学におけるチェスタトンの影響については、今後注目されてしかるべきである。中島はチェスタトンの『Orthodoxy』を通じて、人間世界をめぐる問いについて関心を持ち、同書の内

24 木村一信「南洋行—新たな認識との出会い」(前掲『昭和作家のクロノトポス 中島敦』所収) 55~56頁。

容や表現を自らの執筆活動に活かしていた。「奇蹟<sup>25</sup>」とも評された南洋行後の目覚ましい創作期間における文学的展開の背後には、継続的なチェスタトンへの関心とその著作『Orthodoxy』からの多大な影響があったのである。

周知のように中島は、パラオからの帰国後に人間の内面や姿形の〈変化〉をはじめ、属する世界の〈逆転〉といったテーマを繰り返し描き、一貫して外部の視点から人間存在のありようを浮かび上がらせる試みを続けてきた。とくに人間心理の〈不可解さ〉の追究は、中島文学の根幹として、古今の中国から南洋へと拡大した物語世界の中に人間の姿を新たに捉える試みとなり、その南洋行後の文学世界に一層の豊かさと充実をもたらした。

南洋行後の作品は、チェスタトンへの継続的な関心を前提に、中国古典や南洋の神話伝説のみならず、キリスト教への強い関心によって結実したものでもあった。いわば『Orthodoxy』は、「山月記」「幸福」の成立に不可欠な奥底としてあったのである。こうした作品の素材や思想的な広がりや相即して、中島文学は内容においても一層の深まりを獲得していく。その意味で、中島敦のチェスタトン受容は最晩年の「弟子」「名人伝」「李陵」における文学的達成の濫觴でもあったと考えられる。

「山月記」と「幸福」を結ぶ南洋行前後の文学からは、チェスタトンが与えた中島文学への影響の大きさが指摘できるとともに、同時期中島文学における人間存在や世界認識に関する思索的基盤の形成と、それに立脚した認識の深化の過程や諸相が浮かび上がってくる。今後さらに中島文学におけるチェスタトンの受容について分析することで、より精緻に「山月記」から「幸福」への展開と、「弟子」「名人伝」「李陵」といった後の作品群に結実する中島文学の特質とその意義を明らかにしていきたい。

## 付記

中島敦の文章の底本は、『中島敦全集』全3巻（筑摩書房、2001年10月、2001年12月、2002年2月）とし、引用は全てこれに拠った。引用の際は、原則としてルビ・傍点・旧仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字へ改めた。

## 謝辞

小論に掲げたすべての図版は、財団法人神奈川文学振興会編集『DVD-ROM版 県立神奈川近代文学館蔵 中島敦文庫直筆資料画像データベース』（県立神奈川近代文学館および財団法人神奈川文学振興会発行、2009年6月発行）に拠った。掲載の許可を頂いた県立神奈川近代文学館に深謝申し上げる。

---

25 勝又浩「作家解題」（勝又浩編著『Spirit 中島敦—作家と作品』所収、有精堂出版、1984年7月）40頁。